

『信仰による賛美へ』ハバクク3:16-19

3:16 わたしは聞いて、わたしのからだはわななき、わたしのくちびるはその声を聞いて震える。腐れはわたしの骨に入り、わたしの歩みは、わたしの下によろめく。わたしはわれわれに攻め寄せる民の上に／悩みの日の臨むのを静かに待とう。

3:17 いちじくの木は花咲かず、ぶどうの木は実らず、オリーブの木の産はむなしくなり、田畑は食物を生ぜず、おりには羊が絶え、牛舎には牛がいなくなる。

3:18 しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救の神によって喜ぶ。

3:19 主なる神はわたしの力であって、わたしの足を雌じかの足のようにし、わたしに高い所を歩ませられる。これを琴に合わせ、聖歌隊の指揮者によって歌わせる。

●序論

改めて「信仰」とは何だろうか。聖書は語ります。

さて、信仰とは、望んでいる事がらを確認し、まだ見ていない事実を確認することである。昔の人たちは、この信仰のゆえに賞賛された。（ヘブル11:1-2）

この昔の人たちに、ハバククも含まれていることは確かです。

信仰によって、ノアはまだ見ていない事がらについて御告げを受け、恐れかしこみつつ、その家族を救うために箱舟を造り、その信仰によって世の罪をさばき、そして、信仰による義を受け継ぐ者となった。（ヘブル11:7）

共通するのは、彼らが、神が語られた「まだ見ていない事実」に目を向けて信じ、その目で見ること、得ることはできなかったけれども、信じて生き抜いた人たちでした。

さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。（ヘブル11:39）

さて、先日見たハバクク書の前半1章から2章にわたって、ハバククは神さまとの対話を重ね、これから迎える自分の愛する母国ユダ王国の運命を聞かされました。

それらは、この預言を聞いたときには起こっていない、経験していない出来事でした。しかも受け入れがたい辛い将来です。

それでも、神が語られたことは必ず成る、ということを彼は信じたのです。

そして今日、3章の最後の部分をお読みしました。

ここはハバククの祈りが神さまへの信仰による賛美となって結ばれているのです。

3:18 しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救の神によって喜ぶ。

信じる心とその歩みは、賛美に結ばれる。それが今日の結論です。

信仰がなくては、神に喜ばれることはできない。なぜなら、神に来る者は、神のいますことと、ご自分を求める者に報いて下さることとを、必ず信じるはずだからである。（ヘブル11:6）

信じる者には、神に喜ばれること、その喜びを経験することができるのです。

●本論

信じる者は…

I. 主を待ち望む者とされた

先週、「結論、主を待ち望む」と題した内容を振り返ります。

そこにはハバククの「なぜ？」と繰り返すと神さまに問いかける姿がありました。

①「神さまは、なぜ、切に求めるわたしの祈りに答えてくれないのか？」というもの
ハバクク書1:2-4

主よ、わたしが呼んでいるのに、いつまであなたは聞きいれて下さらないのか。

...

道徳的にも、霊的にも退廃し、暴虐に満ちたその国の中に生きて、この国を愛しつつ、神さまにしかこの国を変えることができない…と、祈り続けてきた彼の訴えでした。

それに対して、神は、周辺に起こる、もっと悪い国カルデヤ人によってユダは滅ぼされることを告げたので、ここでさらに「なぜですか？」とハバククは問い直すのです。

1:13(LB) 私たちは悪い者ですが、彼らはもっと悪いのです。どんな罪をも見のがさないあなたは、私たちが彼らにのみ込まれるのをただ立って見ておられるのですか。悪者たちが彼らよりましな者を滅ぼすのを、黙って見過ごすべきでしょうか。

人間的に、常識的に見て、そんなことはあってはならないと、不満を素直に表す。それでも彼は、神さまを待ち望むことをやめませんでした。それが2章の最初です。

2:1 わたしはわたしの見張所に立ち、物見やぐらに身を置き、望み見て、彼がわたしになんと語られるかを見、またわたしの訴えについて わたし自らなんと答えたらよかろうかを見よう。

それは霊的な「見張り人」の姿。そこで”「主の答え」を待ち望む人”のありさまだと。

「主が私に何を語り、わたしの訴えに何と答えるか」と。

そしてもう一つ、ここには「わたし自らなんと答えたらよかろうかを見よう」と神の答えに対しての自分の心、応答のありさまをも見張っていると話したのです。

自分の思うような答えではなかった、それを聞いた彼は、それでも神を「望み見て」信頼を置いて、神の答えを見張り、また自分の心をも見張っていた、ということです。

そこで彼はさらに主の言葉を聞きました。

2:4 見よ、その魂の正しくない者（高慢な者）は衰える。しかし義人はその信仰によって生きる。

これが先週の結論とされた言葉で。ここに言う、正しくない者、高慢な者は、「あなたはそういうけれど、わたしはこちらの方が正しいしベストだと思うから、譲れません」というありさまで。

ここでハバククは、ただ不満を鳴らしていたわけではありませんでした。心を主に向

けて神さまとの対話としたのです。彼は、神さまを信頼することをやめなかったのです。

彼が真実に求めたのは、「主が私に何を語り、わたしの訴えに何と答えるか」でした。

それを聞くために彼はそこで、主の言葉を待ち望んだのです。

わたしたちも、いろいろな思いと葛藤を抱えながらも、心を決めて、神を待ち望む者でありたいと願っています。それが信仰の人の歩み、神と人の心の見張り人の姿です。

先週の最後の結論は、「しかし義人はその信仰によって生きる」でした。

この世のどこまでも、最善を知る神さまのご支配の内にあると信じて生きること。この方は、わたしの思いや見えているものをはるかに超えて愛をもってその御業を行われることを信じることなのです。

Ⅱ. すべてを主がご存じです

2章の後半には、「なぜ、邪悪な国の繁栄と暴挙を、そのまま許されるのですか？」との問いかけへの答えがあります。

6節から始まる「…すなわち言う、『わざわざいなるかな、…』」と。

ここではそのすべてを取り上げることはしません。覚えてほしいことは一つです。

神さまはすべてをご存じである。その傲慢の報いを与えられたのは神さまであると。

2:12-14 わざわいなるかな、血をもって町を建て、悪をもって町を築く者よ。

見よ、もろもろの民は火のために労し、もろもろの国びとはむなしい事のために疲れる。これは万軍の主から出る言葉ではないか。海が水でおおわれているように、地は主の栄光の知識で満たされるからである。

繰り返し申し上げます。今の時代にも通じることだからです。

「神がいるのであれば、なぜこんな暴虐を放置されるのか？」。それはこのハバクク自身が持った問いかけでした。彼が教えられたのは、「神さまは見過ごしにしているのではない。神はすべてをご存じで、必ずそこに報いがある」ということです。

わたしたちの時間やタイミングではない。けれどもクリスチャンは、主を待ち望むことです。

そうして「2:4 …しかし義人はその信仰によって生きる」という生きざまに至るのです。

Ⅲ. 信仰は賛美に結ばれます

ハバクク書3章は、悔い改めや説教ではなく、信仰による賛美で結ばれます。

彼は、バビロンの侵略という恐ろしい将来を知らされました。国は滅ぼされ、多くの命が奪われる。この章には最初その暗い状況が描かれます。

16-17(LB)このすべてを聞いて、私は震え、歯ががくがくしています。足もとがふらつき、ぶるぶる震えています。…いちじくの木が全滅して花も実もつけず、オリーブの木も実りがなく、畑が荒れたままであっても、羊の群れが野で死に、牛小屋がからっぽ…

すなわち、「生活の基盤がすべて崩れ落ちる」ほどの現実です。しかし、そんな極限状態を知ってもなお、ハバククは言うのです。

3:18 しかし、わたしは主によって楽しみ、わが救の神によって喜ぶ。

その信頼の根拠として語られたのが今日の19節です。

3:19 主なる神はわたしの力であって、わたしの足を雌じかの足のようにし、わたしに高い所を歩ませられる。

雌じか（鹿）の足取りは確かで、険しい崖でも落ちることがありません。人間なら踏み外すような場所でも、鹿は軽やかに、力強く進んでいきます。

「私にはできない。しかし、神が私に“その足”を与えてくださる。」と。それが彼が抱いた信仰です。それは神の恵みと愛に支えられた、最高のバランス感覚を持った信仰者の歩みに似ているということです。

わたしたちも、人生の中で「険しい崖のような道」を通ることがあります。ハバククは語ります。

神は“状況をただ変える”のではなく、“わたしたちの足を強くする”お方だ。崖そのものは変わらないかもしれない。問題は明日も続いているかもしれない。しかし、わたしたちは落ちない。倒れない。ということです。

それが、「主なる神はわたしの力」という言葉の意味です。

●さいごに

私たちが必要としているのは、「どんな道をも歩み抜くことができる“主にある力”」です。それが、ここで信仰による賛美として表されています。

聖書を見ると、経験した奇跡や癒し、御業を受けて感謝し、賛美するシーンもありますが、それ以上に、困難や問題の中で、信仰者たちは賛美しているのは、驚きです。

パウロとシラスは、反対者たちの妬みによって牢獄に入れられた時、彼らはそこで不満や文句で、自らの心を損なうことなく、神さまを見上げて賛美しました。

真夜中ごろ、パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけたが、囚人たちは耳をすまして聞きいていた。（使徒16:25）

教会は、キリストの十字架の贖いを信じ、この世の過酷な現実の中でも、その最高のバランス感覚と力ある足をうけつぐ存在として、この地上に置かれています。

主はわたしたちに確かな足取りを与え、あなたを高い所へと導いてくださると信じます。

3:19 主なる神はわたしの力であって、わたしの足を雌じかの足のようにし、わたしに高い所を歩ませられる。